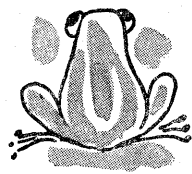


やぶにらみの「お片付け」考



利島保

幼稚園で先生が、「お片付けですよ」という言葉を発すると、条件反射的に子どもがいく人かがこの言葉を復唱しはじめ、それと同時に積木など遊具が幼い手で定位置におかれ始める。またある場合には、ラウドスピーカから音楽が流れ、これとともに子どものお片付け行動が始まるのである。

確かに、子どもたちのこれらの行動する姿にはほほえましいものがある。しかし、ちょっとひねくれてみると、この時ほど子どもの行動が斉一化し、なにかしつつけくさいにおいを感じることもないのである。いわんや、バックグラウンドミュージックでもないというのなら、チャップリンのモダンタイムスよろしく、工場の単純な流れ作業をくり返す人間のシーンすら思い浮かべるのである。

なぜ、私がこのようなひがんだ連想をするのかを読者の方々に聞きたいと思う。

この文を書きながら私の書齋を見まわすと、およそ片付けられ整理された状態とはいえないほど雑然としている。「お片付け」、小さいころから母にいわれ、幼稚園の先生にいわれ、学校時代は整理、整頓と板書された文字をみながら、片付けることを要求されつづけてきたし、多分、そのころ自分も実行していたと思うのだが、大人になった現在どうも片付けることはが手だ。にが手というよりも、雑然としているなりに整理され片付けがされていると自負しているのである。

このような合理化をしながら私自身、片付けなるものをサポートしているのである。それも小さいころからしつけられた行動を定着

させないままで……。

そこで、お片付けの本質について考えさせられるもう一つの話
を思い出すのである。それは長谷川町子さんのサザエさんの漫画
の一つである。

いその一家が居間でくつろいでいる所へ、客が入ってこようと
した。一家はあわてて、そこかしこにあるものをいそいで片付
け、押し入れにしまいこんだ。ほっとしたのもつかの間、実はそ
の客がフスマのはりかえにやって来たフスマ屋で、くだんの押入
れのフスマを取りはずしたとたん、押入れの中からさきほどあわ
てて片付けた品々がとび出して、一家が顔を赤らめるといふもの
である。

このようなことは、われわれの生活の場にも大なり小なり似た
ことがある。すなわち片付けは、単に他人に対する“ミエ”のた
めのとりつくろいであることも応々にしてあるのである。

片付けは、生活する上で環境の整備、無駄のない生活をおくる
ためには必要と考えるのではあるが、これは、日ごろの生活態
度、家庭環境によって大きく左右される生活の知恵の上に成り立
つものなのである。したがって、画一的におしつけたしつけで
は、決して生活に根をおろさないで、ものぐさ者は合理化によっ
て片付けをサボるし、ミエの上だけの片付けをやったりする。

もう一度幼稚園のお片付けの話にもどってみると、およそ、片
付けを日常のルーティーンとして子どもに要求することが、どれだ
け教育的意義をもつのだろうか。どうも、“お片付け”なるもの
を一種の徳目的行動として、しつけという錦の御旗のもとに、い
かにも教育でございませうというにおいをぶんぶんとさせて、子ど
もにやらせている感じがしてならないのである。

片付けが、子どもに行動のけじめをつけたり、環境の整備に気
付かせ、活動しやすしい環境作りをさせるといふ機能をもつことを
認めるにやぶさかではないが、実際には、教師は子どもが片付け
行動をすることのみに満足する傾向があるのではなからうか。教
師の号令一下、“お片付け”行動がおこるなんてあまり気味のい
いものではない。しかも、この号令が今まで、のびのびと活動し
ていた子どもたちのムードをものみごとに破壊することさえ考
えずに、単純に下されているとすればなおさらのことである。も
っとたちが悪くなると、教師の意図にそって、後で教師が掃除し
やすいように片付けさせてしまうことがありはしないだろうか。
片付けをしている幼児の中に入っていくと、彼らは実にたのし
く、まじめに片付けをやっている。だからこそ、変なやぼったい
目的論で、お片付けを考えてはならないと思う。

ある時、こんな情景を目にしたのである。子どもたちが、部屋

のまん中で大きなダンボール箱をもち出してビルディングを作り出した。降園時刻になっても、まだビルは完成に至らず、それにもっとほかのものも作りたかったらしい。子どもたちは、翌日もその続きをやりたいので、そのままの状態にしておいてほしい旨を教師につげた。教師は少しとまどったが、「いいわ、そのままにして、まわりのいらぬものだけ、片付けましょうよ」と答えた。多分、翌朝子どもたちは再び、幼稚園での彼らの夢を発展させたであろう。

このようすをみて、私は、この教師があとの掃除をどうしようと考えながらも、完全破壊主義者でなく、お片付けの程度を明日の子どもの生活の続行にさしつかえのないくらいにまで我慢してくれたことにうれしさを感じた。

片付けが環境整理を目的とするのなら、この環境で生活する子どもへの行動が十分になじめることも含めて考える必要があるのではなからうか、その意味で先述の教師のお片付けに対する認識はすばらしいと思ったのである。片付けることのみが先行し、いつも一から出なおしの活動をつづけるのでは、潔へき感の教育はできて、生活が角ばってばかりいてよどみがなすぎると。私はそんな流れの生活がいやだから、こんな考えを“お片付け”に対してもつようになったのである。

多分、教師だって儒学者的生活をしている人ばかりではあるまい。中には横着が服を着ているような人もあるだろう(失言)。また、大なり小なり私なみのものぐさもいらっしやるだろう。それなのに、子どもにだけしつけ観で、片付けを押しつけるのは考えものだと思う。

“お片付け”の語と幼稚園の教師の号令とを短絡的に結びつけてしまう私の考え方は確かにやぶにらみな見解である。しかし、あえてこのような極論を述べるのは、“お片付け”が幼児の生活の中斷、妨害的役割をはたしたり、画一行動に慣れさせるといった危険を少しでものぞいてほしいし、“お片付け”が幼稚園の教育の専売特許になってほしくないという、これまたやぶにらみの考えから出たものである。

こんなことを書き終えたころ、私の背の方から妻の声が聞こえた。「あなた、もう少し片付けをちゃんとして下さいよ」

(広島大学教育学部)